

# 二群二種の視覚的知覚課題と4つの遅延条件における記憶過程

足立圭子

(よこはま児童文化研究)

KEY WORDS: 視覚的知覚課題 遅延条件 記憶過程

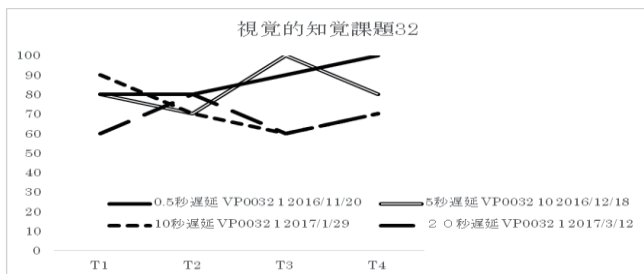
## 1 目的

達成率の減少は遅延時間（保持時間）が長くなるほど大きくなるという仮説の下で、「T<sub>1</sub>-T<sub>2</sub>-T<sub>3</sub>-T<sub>4</sub>学習法」を使用して、2群2種の視覚的知覚課題と4つの遅延条件下の達成率の変動から、記憶過程を実践的に検討する。

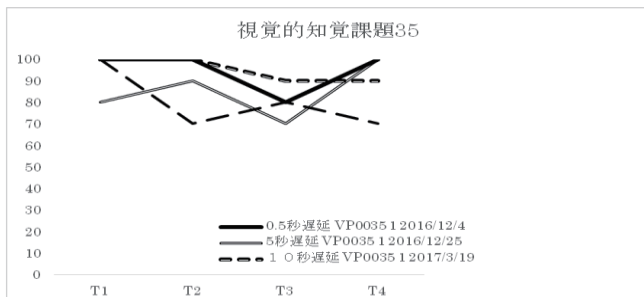
## 2 方法

- (1) 実験参加者は、知的障がいの男性 A (26 歳) 1 名であった。A はこれまで「T<sub>1</sub>-T<sub>2</sub>-T<sub>3</sub>-T<sub>4</sub>学習法」において 2450 課題以上の体験をしてきている。
- (2) 実験場所は、本研究所の学習室であった。
- (3) 実施結果は 2016 年 6 月から 2017 年 4 月までの間に計測したものである。
- (4) 研究対象課題のワークシートは、視覚的知覚課題の中から選択した 8 課題 (24 対 27・25 対 28・32 対 35・33 対 36) である。
- (5) 課題の呈示-選択の手続きは
  - ① 呈示時間は、瞬間呈示の 0.5 秒とした。
  - ② 選択取得までの遅延時間は 0.5 秒、5 秒、10 秒そして 20 秒の 4 種に設定した。
- (6) 実施装置は、自作した「よこはま児童文化研究所式刺激提示装置」(YLB) を用い「T<sub>1</sub>-T<sub>2</sub>-T<sub>3</sub>-T<sub>4</sub>学習法」を使用した。

## 3 結果と考察



グラフ 1: 視覚的知覚課題 32 のグラフ



グラフ 2: 視覚的知覚課題 35 のグラフ

考察の視点は、(1) 定型「N」型曲線の有無、(2) 遅延条件における順位、(3) 対課題の結果からした。

表 1: 結果のまとめ

群	種	課題番号	図形の特徴		遅延条件におけるT <sub>1</sub> の順位				N型曲線の数
			2種の違い	色数	0.5秒	5秒	10秒	20秒	
1群	1種	24	2個の▲の色の違い	3	1	2	3	4	0
		27	い	3	1	2	2	2	1
	2種	25	3個の▲の色の違い	4	1	2	2	2	1
		28	い	4	2	1	2	1	1
2群	1種	32	上段の■の配色	4	2	2	1	4	1
		35	の順序	4	1	4	1	1	1
	2種	33	■の数 上段3	モ/クロ	1	3	2	4	0
		36	下段1の上下反対	モ/クロ	2	1	2	2	0

考察 1、まず、定型「N」型曲線の有無から考察する。定型「N」型曲線が、遅延条件 4、視覚的知覚課題 8 で、5 ケース (15%) しかなかった。これは、結果グラフから見てわかるようになりに高率の達成率における 15% であることから、長期にわたる「T<sub>1</sub>-T<sub>2</sub>-T<sub>3</sub>-T<sub>4</sub>学習法」の学習法が獲得された上での割合である。従って、本実践者は P 音があってもなくても達成率への影響は少ないとみられる。

考察 2、次に、遅延条件における順位から分析する。表からわかるように、仮説通りの結果を示した視覚的知覚課題はきわめて少なかった。視覚的知覚課題 24 の T<sub>1</sub>、視覚的知覚課題 25 の T<sub>1</sub> と T<sub>3</sub>、そして、視覚的知覚課題 33 の T<sub>1</sub> の 4 ケースだけであった。これは全ケース数が 32 からみれば 12% というきわめて低率の結果であった。これは、定型「N」型曲線が少なかった原因と重複する「T<sub>1</sub>-T<sub>2</sub>-T<sub>3</sub>-T<sub>4</sub>学習法」の積み上げの結果がもたらしたものとみられる。

また、5 秒遅延条件で、順位 1 が 22 (68%)、それに対して、20 秒遅延条件で順位 1 が 4 ケース (12%)、順位 4 が 20 ケース (62%) の結果からみて、5 秒遅延と 20 秒遅延においては、一定程度、仮説が支持されたようにみえる。

考察 3、最後に、対課題の結果から考察する。

2 群 2 種で設定されていた。まず、1 群から考察しよう。1 種では、定型「N」型曲線と、遅延条件における順位において、この 2 種に目立った違いは見られなかった。2 種では、視覚的知覚課題 25 において、仮説通りの結果が T<sub>1</sub> と T<sub>3</sub> に見られた。これは、種の違いによる結果とも考えられるが、遅延条件の影響かもしれない。

次に、2 群を考察しよう。1 種の 20 秒遅延、2 種の 5 秒遅延に定型「N」型曲線が見られた。2 種では、定型「N」型曲線はなく、視覚的知覚課題 33 の T<sub>1</sub> で仮説通りの結果が見られた。また、達成率からみても、視覚的知覚課題 36 に揺れがみられたが、他はそれほど対課題の影響がみられなかった。

## 4 結論

達成率の減少は遅延時間（保持時間）が長くなるほど大きくなるという仮説は、0.5 秒遅延、5 秒遅延、10 秒遅延そして 20 秒遅延という順序に支持されなかったが、0.5 秒遅延と 20 秒遅延間では一定程度の支持は得られた。今後は遅延条件の設定をさらに検討する必要がある。論文作成に御協力下さいました A さんと、ご家族に心より感謝申し上げます。Keiko Adati